上伊那音楽教育研究会

ハーモニー

第４号

令和８年１０月２３日

文責　岡部あすか（伊那西小）

10月20日に教科・課題別等授業参観研究会がありました。

午前中は、田中万智先生の研究授業を参観させていただき、 能の授業を通して、音楽の特徴に着目した鑑賞の授業について、多くのことを学ばせていただきました。午後では、グループ演習を行い、歌唱共通教材についての悩み、アドバイスを共有し、授業展開を考えました。その後の臼井先生の講義では、音楽づくりのポイントや、教師自身の教材への向き合い方、歌唱指導時の音とりについて等、先生方の悩みに対して、一つずつ丁寧に、そして楽しく教えていただきました。

以下では、出てきた意見や講義の内容を一部まとめてありますので、ご自身の今後の教材研究に生かしていただければ幸いです。



～研究授業「能の楽しみ方を見つけよう」～

能と歌舞伎の声・楽器の違いを探す場面

全体で一度聞いた後、タブレットとヘッドホンを用いて、一人ひとり聞きながらワークシートに記入する時間でした。個別で聞き進められるため、気になる箇所で止めたり、戻ったり、進んだり、自分のペースでじっくり聞き、比較している姿がありました。

グループで旋律を線で書き表したり、動作化したりする場面

「もっと低いところから始まるんじゃない？」「ここは上に行っている」「ずっと一定だね。」等、
生徒同士で気づいたことを共有しながら、音の高低や強弱を書き示していました。
歌う際には、自分たちが描いた線を見ながら、楽しんで声に出していました。事前に線を描くことで、イメージしやすく、歌うハードルも下がったのではないかな、と思います。
旋律の上下を立ったり座ったりの上下運動で表す際には、生徒たちがすごく笑顔で笑い声をあげながら活動していました。
体を使ったり、歌ったりと、様々なアプローチで能と歌舞伎の音楽を繰り返し聞くことで、歌舞伎と能の旋律の動きの違いを実感していました。

能の魅力を考える場面

田中先生の「発想の転換が必要です。」という言葉を皮切りに、今まで気づいてきた能の音楽の特徴を魅力として言語化していく姿がありました。「能の音楽の魅力とは？」というパッと答えることの難しい質問に、多くの生徒が悩まずに書き込んでいっている姿に、一時間の授業の大きな価値を感じました。

臼井先生からのご指導（一部）

〇物語にフォーカスしがちな伝統音楽の授業だけれど、音楽に目を向けることができていた。
〇動く活動の際、能を聞いているときにじっとすわっているだけなのは、もったいない。ググっと動いている生徒、小さく揺れている生徒を引き出すことで、ただの単調な音楽ではない、少しの揺らぎをつかませることができる。うたいのノリを身体でつかむことで、そのノリが連続しているところ、ノリを外されたところの面白さを実感することができるのではないか。

グループ演習　苦手克服！共通教材を用いた授業づくり

曲ごと数人一組のグループになり、
悩みや授業展開について話し合いました。
一人では考えつかないようなアイデアを
教えていただくことができ、
日々の授業づくりの手助けになる時間でした。





臼井学先生に学ぶ音楽教育の疑問・悩み解決

歌唱共通教材について

苦手意識を持っていらっしゃる方も多いところですが、歌唱共通教材の成り立ちから考えると、
日本の風景や季節、言葉、などの日常生活に密接に結びついた文化を学ぶことや、
老若男女歌えるようになることが大事であるため、音楽的に深掘るよりも、
日本人の文化財産や、美的感覚を知るために、歌えるようになることが
重要だということでした。難しいからやらない、のではなく、
少しハードルを下げて、教員も子供も、楽しく取り組むようにしていきたいです。



歌唱指導について

指導する際には、様々なイメージを伝えていくことが有効であるため、
イメージのバリエーションを増やすことが大切だそうです。
歌唱指導と切っても切り離せない「音とり」については、
なかなかアルトの音が取れない、ソプラノに引っ張られてしまう、
という悩みが絶えませんが、それは「音とり」ではなく、
「音合わせ」になってしまっていないか？というハッとするお言葉がありました。
パート練習の際も、鍵盤で鳴っている基準になる音に合わせているだけのため、
全体で合わせると、より認識しやすい音に引っ張られてしまうのは当然です。
歌詞を音程に合わせて書いてみると、歌えるけど書けない子供が多いそうです。次は上がるのか、下がるのか、そのままなのかを自分で認識して、音を取りに行くことができると、音とりになるのだと思いました。



音楽づくりについて

ICT の導入により、以前に比べて、音が出しやすい、音が記録しやすい状況であるため、音楽づくりが成立するようになってきました。その際の注意点は、イメージを膨らめる過程で、音とイメージを離れさせない、ということでした。イメージだけ先に具体にしすぎると、音楽を作ろうとなったときに、遠くなりすぎてしまい、音で想起できなくなります。「楽しい感じ→八分音符」「公園の滑り台→音の下向」など、音とイメージを行き来することが音楽づくりでは重要になります。

【臼井先生の授業例】
教材：二小節すべて四分音符で、好きな音を入れるだけ。
→みんなの作品を聞く→大笑いする曲と、いいなという曲がでてくる。
→「なんでこれは笑って、この曲はいいの？」と問いかけると、
音楽的な音の進行要点が見えてくる。→作り直してみる。



音色の学習について




「楽器の違いを聞き分ける」「同じ楽器で違う音色を聞き分ける」という、
大きく分けて 2 つありますが、後者を取り扱うときには、
小学校 3 年生のリコーダーが始まる時が有効だそうです。
息の量、角度の違いで音色やピッチが変わることを、
自分の演奏や友達の演奏を通して実感することができます。
【臼井先生の授業例】
琴の授業で、まずは何も教えず「いい音色で弾くにはどうしたらいい？」と問いかける。
→角で弾くほうが綺麗という気づき→角で弾くと体が曲がっている。→「斜めに引いてみな。」と伝える。
→弾きやすい！→プロの映像を見ると、斜めで弾いていることに気づく。→姿勢と音色がつながる。

小学校低学年の授業の進め方について

保育園からの接続から考えると、遊びの中から、音楽へつなげていくことが重要です。子供たちは十分に遊ばせて、「〇〇さんはたたいて音を出しているけど、〇〇さんは擦って音を出しているね。」「〇〇さんの方が音が大きいね。」等、教員がそれを拾って、言語化し、価値づけることで、次の学年に向けた音楽の素養が培われていく、ということでした。

馴染みのない教材について

「馴染みのない、というのは、子供ではなく教師自身ではないか」という問いかけがありました。子供たちの多くは、ほとんど授業で初めてその曲を知るような状態であるため、様々な曲をフラットにとらえています。特に地域の民謡等に取り組む際には、あまり教師は力まず、自然に、いつも通り進めていくと案外子供も教師も楽しめるかもしれません。自分が面白がれば、子供も面白がってくれるのではないでしょうか。

主体的な授業づくりについて

あまり自発的に声がでない、意見が出ない、発言することに抵抗感があるクラスはどの学校にもあると思います。子供の言葉を拾って、それを教員が価値づけることを繰り返すと、自分の意見で授業が展開していくという自覚が子供に芽生え、積極的に動くようになっていくそうです。子供の意見を引き出し、子供の意見で進めていくことで、子供中心の授業になっていきます。
ただし、子供の意見、行動をじっと待つばかりではなく、待たないできっちり教えるときも必ずあるため、そのバランスを注意することが大切です。

具体的な授業づくりのポイントだけではなく、教師自身の構え方や、子供たちとのかかわり方など、多岐にわたり様々なことを教えていただきました。研究会Ⅲで学んだことを、日々の実践に生かし、子供たちが楽しみながら、様々な視点で音楽と関わるような授業を目指していきたいと思います。
長くなりましたが、読んでいただきありがとうございました。